慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 杉本氏『林邑建國の始祖に就いて』を讀みて |
| Sub Title | |
| Author | ガスパルドヌ, 嘉津子(Gasuparudonu, Katsuko) |
| Publisher | 三田史学会 |
| Publication year | 1935 |
| Jtitle | 史学 Vol.14, No.2 (1935. 8) ,p.77(259)- 93(275) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19350800-0077 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 杉本氏『林邑建國の始祖に就いて』を讀みて

ガスパルドヌ・嘉津子

最近チャム古蹟に親しく杖曳き、些かチャム關係史料の漁り得たるものあり、今桑原博士還曆記念「東洋史論叢」中に現はれた杉本直次郎氏の「林邑國建國の始祖に就いて」を讀む。同氏が逸早くチャンパ王の梵名と支那名との符合の問題に着眼せられて研究の新分野を拓かれた卓見に感謝し度い。たゞ右論文を讀んで生じた多少の疑問を玆に記して同氏の再教を仰がうとするものである。

同氏は支那文獻に見える始祖「區連、區達、區逵」の三つのヴリエーションと、Võ-cạnh 碑文中の梵名 Çri-māra とを種々の點より考證され、その結果區達こそ Çri-māra に對するチャム語の支那音譯であるとせらるゝのである。さうして Aymonier-Cabaton : "Dictionnaire cham-français" に於て ku=çri とあるのを見出され、その故に çri=ku=區 卽ち çri=區 と考へられたのであるが、些かこれは早計に過ぎないであらうか。

支那文獻（梁書、南史）は「高式勝鎧」を以て Vijayavarman（五二六——五二七）に當て、「高式律

陁羅跋摩」を以て Rudravarman（五三〇——五四一）に當てゝゐるが、この六世紀の當時、尙碑文にチャム語のものは現はれなかつたとはいへ、この「高式」が ku çri であることは明らかである。(Cf. Pelliot; Liste provisoire B. E. F. E. O. IV 384, n° 5; G. Maspero: Royaume de Champa p. 79, note 8, 11)その後八世紀の初頭、ハリヴルマン以後次第にサンスクリットと平行して現はれるチャム語の碑文を見ると、王の尊稱は殆んど凡て Yān Pu Ku çri……となつてゐる。卽ち yān は神又は王、pu=pō は主の意で、四つの尊稱を重用してゐるわけである。勿論之に伴ふ支那文獻にも楊普俱毗荼逸施禽(Yān Pu Ku Vijaya Çri)或ひは陽補祇施離皮蘭德加拔麻疊(Yān Pu Ku Çri Vikrantavarman)等、安南文獻の方では俱尸利呵呻排麻羅等がある。若し杉本氏の想像される如く ku が çri の適語(エクイヴレント)なることが認められ、既に çri の代用として用ひられてゐたものならば、その後九世紀以降に至つて何故 ku が çri に代へられないのであらうか。思ふに外國語の輸入過程に於て、ある外國語の意味を理解して之を自國語の同義又は之に近いものに當てはめて使用する、卽飜譯するといふことは、單なる外國語の借入に比して遙かに高級複雜な作用である。その初期に於て先づ複雜困難な飜譯を成し得たチャム人が、數世紀を經てから çri 何某といふサンスクリット式王名をそのまゝ持來つて之に ku をつけるといふ機械的な單純な行爲を行ふといふのは順序倒逆の感がありはしないか。行爲の自然的過程から推しても、殊に後代のこの敬稱重用の習慣から考へても、その初期に çri を ku に飜譯したと見るのは無理な氣がする。

次の māra の達に對するものに就いて云へば、māra から來たチャム語には、例のエーモニエ＝カバトンの辭書三八八頁に、*mar* (bat. jav : mar＝skt : māra) : effrayant, effrayé, mal, dommage, danger (恐れしむ、恐れたる、苦痛、損傷、危險) があり、*Marak, marrak* (skt. māra) : une divinité (神の名)——*açurak marak* (skt. asura māra ?) があり、更に又 *marrak* (skt. māra) : démon, ogre(魔、鬼)がある。これらは明らかに杉本氏の擧げられたる原語の意味を完全に傳へてゐるやうに思はれる。同氏は māra の意味を調べらるゝや、先づ初め王に對する名前としての適不適を考慮さるゝに急にして、次第にその語の原の意味に遠ざかることに意を順ひ、前掲のチャムの轉來語(デリヴティヴ)の存在すること、乃至存在すべきことを知つて居られながら、「連、達、逵のいづれの音にも近くないこと明らか故、他にこれらのいづれかに近い māra の意味を持つチャム語を求めなければならぬ云々」と云つて adat といふ語を發見され、これらの轉來語(デリヴティヴ)には一顧も與へて居られない(二五二頁)。これは ku adat＝回教 なりとの前提に囚はれてゐられたからであらうと思ふ。この場合(gri の ku に於ける時も同樣であるが、)若し marak, marrak, mar などの轉來語が始祖の時代以前に存在しなかつたものとして、adat なる言葉が māra のエクイヴレントと認められたものなら、これらの言葉が adat に遲れてチャム語となることの出來たのが些か變である。卑近な例だが、日本語でも靴、手袋などゝいふ shoes, gloves に對する適當なエクイヴレントを得て之を使用し始めた後に至つては、わざ〳〵シュース、グローヴスなどゝいふ外來語の這入り得な

いやうなものではないだらうか。その國が新語の供給者たる國の文化に甚だしく近づいて行くやうな場合には、後から同義の外來語の出來る可能性もあり得ようが、チャムの印度文化に於けるやそれと反對で、漸次その文化から遠ざかり忘れて行く途上にあつたのだ。之をしも不審と見る所以である。

所で、若し始祖の時代以前にこれらの語があつたとしたら、何故彼等はこれらの言葉を避けて索求百方、意味として隨分遠く、音の上には何ら關係のない adat などゝいふ言葉を持つて來たであらう。カバトンに依れば、近代チャム人は、サンスクリット又はアラビヤ語からの輸入語に對し、意味の方は全然無視しても音に於て自國語に似たものがある時之を持來つて、その外國語を說明するといふことである。Cabaton: "Nouvelles Recherches sur les Chams"(Paris, 1910)を見るに、Pô Yan *Möh* といふ神が Çiva の別名なる *Mahadeva* から來たものであらうといふ推定を說明してその第十五頁の註四に、次の如く云つてゐる。……L'examen des textes montre clairement que les Chams ont une tendence marquée à expliquer, par des mots de leur langue, les termes sanscrits dont le son s'en rapproche quelque peu. Ainsi les Chams traduisent constamment nönöḥ(=namas "hommage à……"), par nömö "traces" etc. etc. Les mots arabes ont subi le même sort. C'est ainsi que *möh* tiré du mot arabe *nabi* "prophète" est couramment confondu avec *möhi*, mot d'origine indienne équivalant à Pô "seigneur" (=skt. nābhi "ombilic, centre, chef") et traduit par "chef" etc. 即ち梵語から來た nömöh といふ「南無」を意味す

る言葉を「跡」といふ意味の nômô なる字を以て說明し、アラビヤ語から來た豫言者を意味する nobi といふ言葉は「主」の意味を持つ nobbi と一般的に混用されてゐるといふ。それ故彼の云はうとしてゐる Pô Yan Môh といふ神の「父」を意味する môh といふ字は「大なる」といふ意味の maha から變つたものであらうといふのである。さうしてチヤム語で書かれたものを見ると、チヤム人がかゝる傾向を強く持つてゐることが明瞭りわかるといふ。これはチヤム人が言葉の意味などよりもその音の方を重んずるといふことを示すものであらう。蓋し一民族の言語上の性向などゝいふものは一朝にしてさう容易に變つたり消えてしまつたりするものではない。チヤム族の音を貴ぶ傾向は、恐らく初世紀の頃から持ちつゞけてゐたものと思はれる。己れの接觸する諸外國の言葉を、必要に應じて大した變化も與へずにそのまゝ自國語の中に片端から取入れて來たチヤム語の語囊が、この間の消息を充分に語るものではないだらうか。かう考へて見る時、原語の意味を最も稀薄にしか持たず、音の上からは最も遠き adat なる言葉を持出して來る程の高尙複雜な行爲が、初世紀、二三世紀の殆んど原始に近いチヤム人に出來たことであらうかを疑ふ。

Cri-māra は、杉本氏の云はるゝ通り初代王名として如何にも相應しくない。之に關し、同氏が同じく不適當な王名として擧げて居らるゝ安南系のラマヤナ物語「嶺南摘怪」中の夜叉王（roi des demons）は、之を佛敎大辭彙の夜叉の條に調べるのに、咸德、暴惡、勇健、貴人、捷疾鬼、祠祭鬼等等、善惡兩

方面の屬性が示されてゐるに反し、同辭彙、マラ（魔羅）の條には「殁者と譯し、死、殺、障礙」とあり、その略名「魔」の條には前條の意の具體化された種々樣々の惡魔の列擧を見るのみにて、杉本氏の見出さんと努めて居らるゝやうな偉大云々の意は一も見當らないのである。敢へて佛教の辭書をひく。何となればこの Võ-cạnh 碑文には極めて强く佛教的思想が示し出されてゐるので、（Cf. Finot, Coedès）この碑の立石者及びその先は佛教信者たらざりしやが疑はれるからである。初代王名として不適當なる、これより甚だしきはない。しかし乍ら由來固有名詞なるものは屢々常識の忖度し難きものがあるので、之を殊更に適當の根據なくして轉意せしめんとする時は、却つて誤りを生ずるのではあるまいか。

扨て、最後の adat といふ言葉である。例のエーモニエ＝カバトンの辭書第十頁には、

Adat: jav., sund. *adat*; mak. *ada*; mal. ādat=ar. عادة (Loi, règle, precepte; mœurs……permission etc, principe accoutumé……magigue; sortilège

等とあつて、勿論杉本氏の强調せらるゝ魔術、魔法なども有るのであるが、それよりもこの語はアラビア語のかの有名な「アダット」の轉來語だつたのである。試みに Houtsma, Basset, Arnold et Hartmann の "Encyclopédia de l'Islam" を引いて見ると、第百二十四頁に 'ada (……Ādat, adat=coutume, usage. Terme de jurisprudence signifiant le droit coutumier pratiqué dans les pays musulmans, independant de la loi canonique etc. とある。若しこのアダットなる言葉がアラビア語のアダーから直接に這入つて來

たものとすれば、それは勿論イスラミズムの傳來を機會とするものでなければならない。さうしてその傳來の年代は明瞭りしないとはいへ、最も早く見ても中世紀を降ることは勿論である。チャンパ國に於ける最も古いイスラミズムの足跡は、ユーベルによれば先づ宋史に見え、既に宋の時代にイスラム信者となつたチャム人のあつたことを認めても甚だしい憶斷ではなからうといふ意味のことを云つてゐる。(B. E, F. E. O. III. 55)それ故他のもつと明瞭な記錄、例へば舊チャンパ國南部から出たイスラムの碑の如き、一は一〇三九年の記あり、他は一〇二五乃至三五年頃のものと推定が附され、(Paul Ravaisse: Deux inscriptions coufiques du Champa, Journal asiatique XX, 1922) 凡てこの以後の事に屬する。しかし乍らアダットといふ言葉そのものは宗教的なものでは無いが故に、イスラミズムとは關係なしに迂廻してマレーの ādat ジャワ、スンダの adat などから間接に這入つて來ることがあり得たとする。然るにアラビヤ人がマレー諸島の諸處に進出したのは最も早くて十三四世紀である。N. T. Krom 博士の "Hindoe-Javaanche Geschiedenis" (2nd ed. 1931) の梗概の Journal of the Burma Research Society vol XXIV part II に現はれたものによると、十三世紀の初頭、アラビヤ人の渡來を期してシュリ・ヂジャヤの衰頽が現はれ始めたといひ、馬觀のジャヴ訪問(一四一三年)の記事を引いて、この地には十五世紀の初めにさへまだマホメット教徒は僅かにその西部に住んでゐて、大部分は尙印度教徒だつたといつてゐる。その東海岸地方に彼等の勢力の强大になつてゐることを一五一四年の De Brito の記錄によ

つて初めて證明してゐる。スンダと呼ばれてゐたその西部地方、パヤ、ランがムーア人の手に落ちたのは一五二二年から二六年までの間であるといつてゐる。さればジャヴ、スンダ、マラッカに、かゝる語が進入し得たであらう時期は寧ろチャンパのそれよりも遲れてゐるといつていゝ。間接的傳來を云ふならば、林邑國始祖の時代を隔ること愈々遠いわけである。茲に於て Çri-māra＝詞藻 の說は一層疑はれて來るのである。

Çri-māra の名は、杉本氏の引いて居られる明史占城傳にいふが如くんば、三十年在位統治の後、山に入つて一年間天意の試みを受け、然して初めて得た「至尊至聖」の稱であるといふ。然らば杉本氏の想像される如く後漢南蠻傳の區憐の區をも cri と見るのは些か不思議である。區憐に就いては、ジョルジュ・マスペロ氏もオルソーも共に一蕃族の族名と看做してゐる。その場合「區」の cri に相當し難きことは勿論であらうが、杉本氏の如く之を蠻夷の長といふ個人と看做すにしても、區連の如く一王國の建設に成功してしかも三十年の統御と天意の試みを經てやうやく得た cri 名であれば、チャム統一前の單なる一小地方の族長が、彼と等しく cri 名をほしいまゝにすることが出來たらうか。元來 cri 名はある特定の神か王かの前に附されるものの如く、例へば後に揭出する現存チャム族間に傳はる歷代王名のリストの中にも、この稱號を冠せられてゐるのは唯一人、Shrii (＝cri) Agarang あるのみである。されば一蕃族の長たる區憐の區は、cri と關係なきチャム語の尊稱なる Pu の音表と看做し度い。ところ

で區連の「區」と區憐の「區」とは同じである。故に區連の區も ku ではあるが、その ku たるや ri を飜譯したものではないと思はれる。ku は成程 ri のエクイヴレントかも知れないが、私はこの場合兩語の間に何らの關係なきものと思ふ。故にこの酋長は Çri-māra たると、ベルゲーニュ、エーモニエの云つてゐるやうに、單なる Mura-Raja たりしとを問はずその人民等からは ku の尊稱を以て呼ばれてゐて、恰も支那人が區の字を以て之にあてはめたのであらう。

扨てその名前であるが、區が既に ku と關係なければ、勿論連も達も達も māra と關はりある譯はない。この三字の何れかは、王の個人的なチャム語の名前、即ちサンスクリットの公式稱號によらざるチャム名の音を表はしたものであらう。由來チャム王にはチャム語の名前があつた筈である。杉本氏もその二四九頁に「こゝにいふ Çri-māra は、いふまでもなくサンスクリットであつてチャム名ではない。そこでこの梵名の持主は必ずや又チャムの原名を持つてゐたに違ひない」といふ正しい見解を述べられたに關はらず、「印度文化にかぶれないで全くチャム語でかゝれた古いインスクリプションでもあつて……」と云つてゐられる所の、そのインスクリプションが存在しないといふだけで「チャムの原名が書殘される場合には、この碑文のやうにサンスクリットで記されたから、そのチャムの原名もサンスクリット化せられたものに違ひなからう云々」とだん〳〵筆者の考へと遠ざかつて行く。サンスクリットに文字だけを借りて、チャムの原名をそのまゝ「サンクリット化」しないで現はすことがどうして出來ない

だらうか。不幸にして書殘されなかつたゞけである。

ところで、エーモニエがフアンラン（平順省）のチャムの一老爺から白紙の帖面を與へ、漆塗の函と交換に彼の所藏するところの寫本から書寫して貰つたといふチャム王年代記といふものがある。（前掲 Grammaire chame p. 78—81 及び Légende historiques p. 151—— Excur. et Recom. T. n° 32, vol. XIV, 1890（極東學院年報以前の眞面目な論文の發表機關であつたこの古い雜誌は、今や印度支那に於ても大きな圖書館でゝもない限り見られない。冗長に見えるかも知れないが、以下採錄するところあり）これは勿論そのまゝでは歷史的價値は殆んど見られない程無稽な要素の勝つたもので、年を單に十二支の動物名で現はし、初代の王に Pô Ovluvah、卽ち回教の alah を据え、以下僅かに三十八王の名をかゝげ、安南を退去した最後の王で結んでゐる。エーモニエはその年、一八八七年から十二支を逆に繰つて行つて、之を西紀にあてはめ、次の如き表を立てた。（Légendes listoriques, p. 151）

（Shri Bancûy に都せる王）

1. Pô Ovloh, 1000—1036
2. Pô Noethuor lak, 1036—1076
3. Pô Patik, 1076—1114
4. Pô Shullaka, 1114—1151

（Bal Hangow に都せる王）

5. Pô Klong dirai (ou garai) 1151—1205

6. Pô Shri Agarang 1205—1247

(Bal Auguê に都せる王)

7. Chêi Anoek 1247—1281

8. Pô Débata Thuor 1281—1306

9. Pô Patal Thuol 1306—1328

10. Pô Binœthuor 1328—1373

11. Pô Parichan 1373—1393

(Bal Batthinœng に於ける安南臣屬王)

12. Pô Kathit 1433—1460

13. Pô Kabrah 1460—1494

14. Pô Kabih 1494—1530

15. Pô Karutdrak 1530—1536

16. Pô Mahesharak 1536—1541

17. Pô Kanœûrai 1541—1553

18. Pô At, 1553—1579

(Pangdarang の臣屬王)

19. Pô Klong Halan 1579—1603

20. Pô Nit 1603—1613

21. Pô Jai Paran 1613—1618

22. Pô Eh Khang 1618—1622

23. Pò Mœh Tuha 1622—1627

24. Pò Ramé 1627—1651

恐らく無政府時代 1651—1652

25. Pò Nrop 1652—1653

恐らく空位時代 1653—1654

(敍任による大名王)

26. Pò Phiktirai da paghuh 1654—1657

27. Pô Jatamœh 1657—1659

恐らく空位時代 1659—1660

28. Pò Thop 1660—1692

三年間空位時代 1692—1695

29. Pô Shaktirai da putih 1695—1696—1728

30. Pô Ganvich 1728—1730

31. Pò Thuttirai 1731—1732

空位時代 1732—1735

（順化の朝廷よりの任命による大名王）

32. Pò Rattirai da putih 1735—1763

33. Pò Tathun da mœh rai 1763—1765

34. Pô Tithum da paguh 1765—1780

35. Pô Tithum da paran 1780—1781

空位時代 1781—1783

36. Chẽi Krẽi Brẽi 1783—1786

35. Pô Tithum da paran（再任）1786—1793

37. Pô Lathum 1793—1799

38. Pô Choûng (最後) 1799—1822

後代に近づくに從つて傳說的要素がなくなつて來て、著るしい史實の符合するものあり。例へば十代目の Pô Binœthuor は安南史に所謂 Chê Bong Nga で、(同上書一六五頁)死に向はんとする王國最後の意氣を示し、東京の奧まで攻入つて安南人を震駭させた大英雄であり、次の Parichan の時代には安南中部の地を蒙塵してファンランに退いたといふ事實を含んでゐるので、之をその支那名「槃羅茶全」にアイデンティファイすることが出來るであらう。エーモニエは尙その他の出來事をば安南史を基礎として大體の見當をつけて見ると、一體が數十年づゝ早くなつてゐる。しかし最後の大名としての王が平順(ビンテュアン)を退去したといふ一八二二年は確かにこの年代記の通り馬の年だといふ。それ故これを全く荒唐無稽のものと看做すわけにはいかない。これらの地名王名の部分的考證はデュラン師によつてその Notes sur les Chams, B. E. F. E. O. V 368—386, VII 313—355 等に於て行はれてゐるが、王名をサンスクリット名前に符合せしめることには至つてゐない。明瞭な歷史的存在と認めらるゝ Pô Binœuor の時代以來、彼等唯一の史料たる碑文の遺されたるもの、僅かに Nauk Glaun Vijaya といふ王子が釋迦紀一三四三年 (B. E. F. E. O. IV 687 參照)を以て、西貢から程近い邊和(ビエンホア)省、Bûn Sôn 村の祠堂內のヴィシュニュ像の背中に遺したもの、平定(ビンディン)省 Bang-Lang の山の碑の二つだけであり、之が卽ち占城王國、否チャム族最後の碑文である。Pô Binœuor に就いてはマスペロ氏の「チャンパ王國」にもこの安南名と

阿答阿者といふ支那名を掲げてゐるに過ぎない。これ以後にあつては、一四五八年まで、支那文獻に於ける麻訶摩訶の類が maha と讀まれる位であつて、しかもそれらに相當すべき王名は表中に缺けてゐるのである。王國沒落に先立つて漸次印度文化を忘れて來たらしいこの民族は、自らさういふ印度的稱號を次第に名乘らなくなつたと見るべきであらう。いづれにせよ、此處に並んだ王達の名前は、その史實的存在たると否とに關はらず、兎に角これがチャム王のチャム名であることには違ひがない。斯の如く、近代のチャム人がその王達を Pô の敬稱を冠して呼んだやうに、彼等の遠き先祖もその酋長乃至王のチャム名に ku の敬稱を附して呼んだものであらう。惜しい哉、Cri-māra 以來のものが無い。それが有りさへしたら問題は無いのであるが、殘念至極といふべきである。右の歷代表は、フアンラン系のもの、卽ち安南に踏留つたチャム人の所有するものである。此處のチャム人はその半數は尙古來のブラーマニズムを奉じてゐるとはいふものゝ實は多くのイスラムの影響を受ける、といふよりも甚だしい混淆をしてゐる。初代の王にアラーを置いてゐるなどはその一つの現はれであり、デュラン師によれば初代を一〇〇〇年に置いてゐるのも恐らくはイスラミズム傳來の時期を示したものであらうといふ。エーモニエは更にカンボヂヤ系のチャムからも彼等に傳はる更に甚だしく無稽な歷代表を三種得てゐるが、Pô Cheung の安南逃避以後の王名が、エーモニエの考證の結果どうやら組立てられるので之を左に示して見ると、

Pô Damoeûn

Pò Tikai

Pò Chmoeng

Pò Nong　1845 頃死亡

Pò Tih　1870 頃死亡

Pò Kû　1840 生る

以上二つの王名表中には、不幸にして我々の求める連、達、逵のいづれかに正確に當りさうなものは見えないのである。但しこれら凡てのチャム名を見る時、屢々多くの王に用ゐられるやうな典型的といひ得るやうな名の無いこと、及び連、達、逵の如くモノシラビックな名の多いことが認められる。それ故この三つの名は同じ程度に王名たる可能性を持つてゐる譯であるが、尙音の上から再びこの表を見る時、Kの音を含むもの絕對に多く、T・P等の强い音を以て始まるか又は之を含んでゐないものはない。一體彼等の語囊に於てKの音が最も重要な位置を占めてゐることは、彼等の原文を一目見ればすぐに肯かれるところである。彼等がサンスクリットを取入れる場合、各語の終りにKを附すのは最も普通な變化の仕方である。この意味で「連」の如く輕くて弱い音を持つたものの可能性は割合に少く思はれる。翻つて支那文獻の方は、區逵とある所の水經注が、最も依據するに足ることは考古學方面から既にオルソー以下の證明するところであり、しかも年代としては事件に最も近く作られたものである。之に依つ

て筆者は區逵説に傾き度いのである。例へば後のリストの最後の王 PU KU などはどうやら之に近いものゝやうである。然らば區憐の憐はどうであるかといはれゝば尚それを後の考證に俟つのみである。大體チャム語を知らずしてはなか〳〵難かしい問題であらう。結局殘つたものは疑問である。乞ふ、幸ひに諸賢の垂教あらんことを。